

神話スライド s e t シリーズ

子の星

スライド枚数 : 18 枚
時間 : 4分 32 秒
イラスト : 三善 和彦
語り : 永井 一郎

LIBRA CORPORATION



1. 江戸時代の大阪に、桑名屋徳蔵、という船頭がいた。

船頭、というのは、ま、船長のことじゃな。
でも、そうは言っても、徳蔵は漁師じゃない。
「北前船」という船で、北海道や 東北からの産物を運び、商いをする商人だったのじゃ。

+音変わり

2.

SE 雷



SE ざざーん！



3. ある嵐の夜のこと、徳蔵の船が荒波にもまれていると、突然、船の前に大きな山が現れた。

海の魔物が見せる幻じゃ。

すると、徳蔵は、声高らかに
こう怒鳴った！



4. 「山なら谷がある！谷に向かって 進め！」
すると、どうじゃろう・
たちどころに山は消えた。



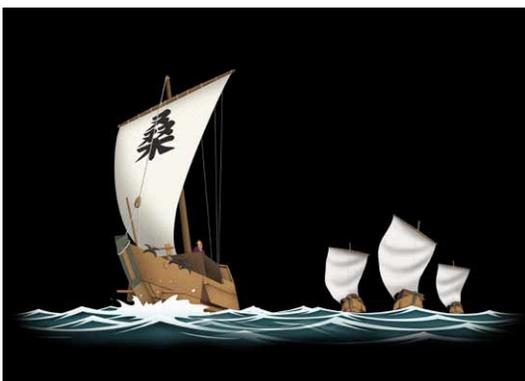
5. ところが、ほっとするまもなく、今度は城が現れる。
しかし、徳蔵はあわてない。
「城なら門がある！門に向かって 進め！」

その声とともに船が進むと、巨大な城も霧のように消えていく……。

徳蔵は、こんなふうに、嵐も、海の魔物もおそれない大変勇敢な船頭だったんじゃ。



6. 徳蔵は、勇敢なばかりではなく、とても頭のよい船頭でもあった。
「北前船」を操るには、正しく北の方角を知ることが必要じゃ。
だからいつだって”ネノホシ”を目印に、夜も休まず船を進めることができた。



7. また、帆の張り方を工夫して、向かい風でもスピードを落とさず進めるようにしたから、他の船は、とても勝負にならない。



8. そうして、徳蔵の商いはどんどん大きくなっていった。



9. そんな徳蔵の留守を守るのは、妻のおみよじゃ。繕い物をしながら徳蔵の航海の無事を祈っていた。

+音変わり



10. そんなある晩、ふと顔を上げると窓のさんの間から”ネノホシ”が輝いているのがみえた。
もちろん、おみよもネノホシが動かない星だと知っていた。
徳蔵が繰り返し言って聞かせていたからじゃ。
「ネノホシさん、うちのひとをおねがいしますよ。」



11. そうつぶやいては、繕い物を続ける。

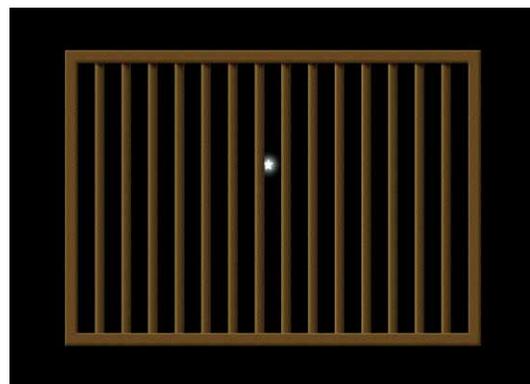
3



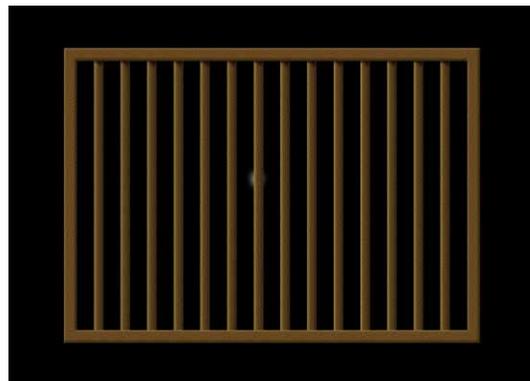
12. ところが、しばらくしてまた、窓を見ると、
なんだかネノホシが動いたように見える。
もし、本当に動いたなら、それを目印にしている徳
蔵は大変じゃ。



13. 奇妙に思ったおみよは、一晩見張って確かめる
ことにした。
そして、眠くならないようにたらいに水を張り、
その中に入って、”じっと”ネノホシ”を見続けた
のじゃ。



14. すると、どうだろう？



15. 決して動かないはずのネノホシが、実は、窓の
さんの幅ほど、わずかに動いているじゃないか！

+音変わり



16. おみよはもちろん、帰ってきた徳蔵にそのことを伝えた。

「ネノホシが動く」

いままで、だあれも知らなかった大発見じゃ。



17. 徳蔵の船は、それでもまして、正しく北の方角を知りながら、航海できるようになったということじゃ。

+音終わり